

地域特産種量産放流技術開発事業 (オニオコゼ)

曾田一志・後藤悦郎

要 約

1. 種苗生産技術開発

- ・7年度および8年度購入の天然魚94尾を採卵用親魚として用いた。
- ・総浮上卵数は127万粒、平均浮上卵率は73%であった。
- ・平均全長25cm以上の親魚群しか産卵しなかった。
- ・14回の飼育で14,364尾の着底魚を生産した。生残率は0~4.4%であった。

2. 中間育成技術開発

- ・40mmサイズの稚魚10,142尾を生産した(生残率70.6%)。
- ・飼育開始後に滑走細菌症による斃死が発生したが、生物餌料単独給餌と薬浴によって、早期に抑えられた。

3. 資源添加技術開発

- ・チューブタグによる外部標識試験を行ない、H7年生産魚の標識後の生残率は69.2%であった。標識基部への抗生物質の塗布と標識後の薬浴に効果がみられた。
- ・60mmから140mmサイズの0歳魚、1歳魚、2歳魚、延べ7,141尾を大社湾の水深15mの地点に放流した。放流1ヶ月後の観察では6尾観察されたのみであった。
- ・3漁協を対象とした買い取り調査による混獲率は48.4%(調査尾数161尾)であった。放流地点に最も近い多伎町漁業協同組合でのみ放流魚が回収され、同漁業協同組合での混獲率は70.3%(調査尾数111尾)であった。

4. 資源生態調査

- ・稚魚ネットおよび稚魚用桁曳き網を用いた採集調査により、昨年と同様に沿岸の水深25mから40mの地点で6尾の浮遊仔魚が得られた。

*詳細は、平成8年度地域特産種量産放流技術開発事業報告書(魚類グループ)を参照のこと。

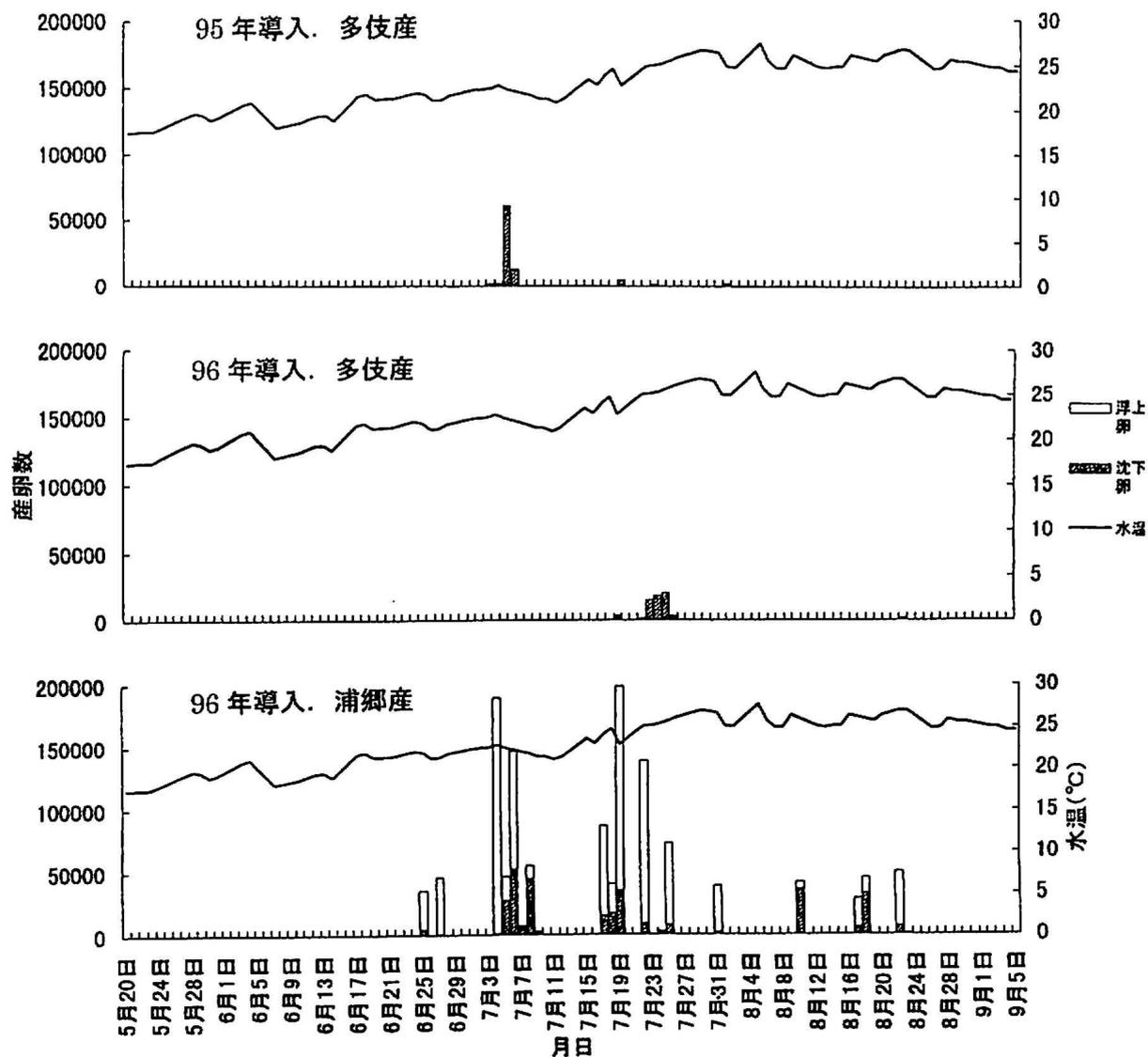


図1 水槽別の産卵数と水温の変動